

中30名, 老人保健施設入所中2名であり, 他院へ入院中の時点での相談者が多かった。相談へ至った経路は, 主治医よりの紹介や当院の医療・福祉相談を通してなどのほか, 地域の保健婦や在宅介護支援センターからの依頼も少なくなかった。3) 疾患別にみると, 脳血管障害75名が最も多く, 以下頭部外傷など6名, 脊髄損傷4名, パーキンソン病2名, 切断1名, 骨折1名であった。4) 相談の結果は, リハの適応があり当科への入院予約としたもの50名, 外来を含む他院での治療継続をすすめたもの17名, 在宅サービス調整により自宅療養の継続を図ったもの9名, 老人保健施設への入所が適当と判断したもの9名, 当科での外来リハ通院が4名であった。

P-68 利用者や援助の実態から見た老人デイケアの課題

国立療養所長崎病院

浜村 明德・梅木 義臣

長崎大学医療短大 松坂 誠應

国立長崎中央病院 藤田 雅章

【目的】 老人デイケア利用者の状況や利用目的などに関する調査を行ったので, これらの結果から, デイケアの機能や在り方について報告する。

【対象と方法】 デイケア実施施設中, 14施設(病院4か所, 診療所6か所, 老健4か所)の調査日総利用者420名を対象とした。

【結果と考察】 ①基礎疾患で, 脳卒中は全体の約20%, 痴呆38%, 生活に影響する疾患なし約20%と, 利用者が多様な疾病をもつとともに, 虚弱老人も対象になっていた。②リハ治療の経験は全体の30%で, 回復期のリハからデイケアにつなげるようなケースは多くなかった。③生活自立度ではJとAランクが全体の約90%で, 利用者のお大半が施設内歩行可能と思われ, 対象者の検討が課題と思われた。④利用期間は1年未満が全体の44%, 利用頻度は月平均13.1回となっていた。⑤発症1年未満の脳卒中利用者が占める割合は全体の37%で, 医療のかかわりが期待される発症間もないケースが, デイケアに多くないことは利用目的とも関連し, 重要な検討課題となる。⑥利用目的では, 開始時から, 対人交流などのSocial Activity, 機能維持, 家族負担軽減などを目的とするケー

スが多く, 6か月以上経過しても変化に乏しく, 援助の在り方にも課題があると考えられた。⑦サービス併用ケースも極めて少なく, ケアマネジメントの不十分さが推測された。

【結論】 対象者, 利用頻度, かかわり方, 援助の質, 運営の在り方などに課題があると考えられた。

P-69 通所リハビリテーションの現状と問題点

日本大学練馬光が丘病院整形外科 大幸 俊三
高野台松本クリニック 松本不二生

東京都練馬区の通所リハビリテーション事業の現状について報告する。平成7年7月～平成8年12月までに通所を終了した88名のうち, 65歳未満は39名(45%)にとどまり, 65歳以上が49名(55%)と多数を占めた。これを本人の能力・希望に応じ, 社会参加への意欲向上を目指すグループと, より訓練に重心を置いて機能向上を目指すグループとの2群に分けて対応している。入所時のADLを厚生省基準で分類すると, J(2)16名, A(1)36名, A(2)14名の3ランクで75%を占めており, 施設の役割に合致した対象層と考えられた。入所後の理学療法の効果を分析すると, 8割以上が機能維持できており, すべての測定項目でJレベルよりA・Bレベルの改善率が高かった。また, 1年以内の再通所率は36%で, そのうち63%が65歳未満であった。

通所リハビリテーション事業は入院リハと在宅リハの間をつなぐ, いわば地域リハの入り口として機能することが求められる。2年間の経過を見ると, 退院時の病院から連絡を受けるケースも増えてきているが, 同時に再通所者が多く, これがさらに増加すると本来の機能を失うことになりかねない。このためにも地域において, 中途障害者・軽度障害者が気軽にかつ低廉に利用できる機能訓練の場の必要性を痛感する。体育館など既存の施設を利用して, 地域リハの受け皿づくりを考えていきたい。